黒毛和種ET産子哺育技術の向上

【研究概要】

都内では受精卵移植技術の普及により、乳牛より黒毛和種子牛を生産し、人工哺育を行う酪農家が増加している。都内酪農家が利用する子牛市場で利益を得るためには120日齢で十分な体重まで育成する必要があるが、多くの酪農家が安定して利益が出せずに苦慮している。そこで、黒毛和種子牛の120日齢出荷に適した哺育方法を検証することを目的に試験を実施した。その中で今年度は、青梅庁舎飼養牛10頭について、標準哺育区と高栄養哺育区の２区にそれぞれ５頭ずつ分類し、哺育・観察を実施した。

（１）120日齢での平均体重は標準哺育区で183.2kg、高栄養哺育区で175.6kgであった。離乳直前の12週齢および離乳後の15週齢の体重において、標準哺育区の方が高栄養哺育区と比較して有意に高かった。

（２）日増体量（DG）について両区で1.0以上であり、３か月齢の時は標準哺育区が高栄養哺育区と比較して高い傾向にあった。また、離乳前後のDGを比較したところ、離乳前は標準哺育区が高栄養哺育区よりも有意に高かった。

（３）両区ともに腹胸比が105日齢で第一胃の十分な発達を示す1.2以上であった。

（４）標準哺育区は高栄養哺育区より離乳前の濃厚飼料摂取量は有意に多かった。

（５）代用乳と濃厚飼料の費用について、標準哺育区は高栄養哺育区よりも6,421円安価であった。